

2003年
7月発行

no. 59

特集

写真で伝える、
写真でつながる

7年目のフォトメッセージコンテスト

1997年に「日本の高校生の日常生活写真コンテスト」として始まったコンテストは、今年度から「高校生のフォトメッセージコンテスト」となります。当初は、日本の高校生の日常生活を海外へ伝えることに焦点を当てていましたが、このメッセージは国内外をあえて分けることなく、国内の同世代に対しても発信するものであること、また高校生の生活を紹介するというより、高校生一人ひとりの考えや生き方を表現してもらおうということで、名称を変更しました。

友だちを深く観察し、自らのあり方も問い直す作品が多く見られるようになり、それとともに、教育的な観点から授業の中で作品づくりに取り組む教師も増えてきました。コンテストの作品づくりから生徒は何を考えたのか、何を学んでいるのか、また教師や審査員は高校生に何を願い何を期待しているのか、それぞれの声を集めました。



特集 p.1

写真で伝える、写真でつながる
7年目のフォトメッセージコンテスト

作品づくりで向き合っ、高校生が考えたこと
ファインダーの向こうの「わたし」と出会う
「本質を見る力」と「自信」を育てる写真教育
人間はすばらしい
国際理解の学びとしての「フォトメッセージ」の取り組み

TJFの事業 p.10

大学等における韓国朝鮮語教育
2002年度調査の中間報告

シリーズ

見る聞く考えるやってみる授業② p.12
教員とNGOが共同作成した国際理解教育教材
「フィリピン・ボックス」

素顔の高校生⑬ p.16
頼れる先輩。私の憧れです。

TJFニュース p.14

写真集『The Way We Are 2002
伝えたい私たちの素顔』を発行 ほか

作品づくりで向き合って、 高校生が考えたこと

主人公のことを伝えるためには、どんな姿を表現したらいいのだろう、一人では何をしているんだろう、家やアルバイト先ではどうだろう、将来のことはどう考えているんだろう。——「高校生のフォトメッセージコンテスト」の作品制作に取り組む高校生たちは、5枚の写真と文章で主人公のことを伝えるために、そんな問いかけを自らに課しています。そして主人公をよりよく知り理解しようと努め、共同で作品を作り上げる過程で、主人公の素晴らしさを再確認したり、新たな一面を発見したりします。撮影者にとって、主人公の姿を深く見つめることが、自分自身について振り返るきっかけとなることも多く、自分自身のあり方や将来のこと、他者との関係や社会との関わりについてまで考える撮影者も少なくありません。

主人公になった高校生もまた、「なぜ私なんかを主人公にしたのだろう」と戸惑いながらも、自分に関心を持って迫ってくる撮影者の姿勢や出来上がった写真から、多くのことを学びます。

二人の高校生が撮影者・主人公として向かい合い、自分を受け入れ支えてくれる互いの存在に気づいた時、自分や相手の存在を一層大切に思うようになるのではないかな。異なる文化的背景を持つ他者との共生も、こうした自己肯定感や身近な人間との関係があつてこそ可能になるのではないかな。そうした視点から、TJFはこのコンテストを国際理解教育の一環として位置づけています。高校生がコンテストの作品を制作し、人と関わる過程で感じたこと、考えたことを、コンテストに寄せられたさまざまなメッセージからご紹介します。

主人公を見つめて発見

〇:主人公

おかんのいろいろな姿を見た

私はいつも一緒にいるサイトウナミコ、通称「おかん」を撮って、彼女のいろいろな姿を見ることができました。「おかん」というあだ名は、おばさん体質で誰にでも明るくふるまうところからつけられたのです。

写真のテーマは『おかんの一日』ということで、おかんの学校生活の様子を撮りました。彼女のまわりからは笑い声が絶えませんが、時には一人で考え込むこともあります。入学当初から茶髪で授業にも消極的な彼女ですが、家族思いのやさしい人です。母子家庭で、まだ小さい妹もいるおかんは、毎日少しでもお母さんの力になるうと努めて、夜は妹の面倒をみるしっかりした姉でもあります。一見、ちゃらちゃらしていているうささを感じを与えますが、その人の気持ちや考えは、触れ合ってみないとわからないものだと感じました。【岐阜県 中川真梨子】



休み時間。教室の外へ出て一人でも何か考えている様子。

〇 斉藤那美子

フジの存在がどれだけ大きいものか分かったよ

いつも明るく元気なフジ。私を勇気づけてくれるフジ。私はそんなフジが大好きだよ。保育園や小学校のころはあまり遊んだことがなかったけど、中学に入ってから少しずつ変わったね。フジは卓球部の部長とかクラスの仕事とかいっぱいやっていて、すごいなと思っていたよ。

高校で「一緒に部活に入る!」って言ってくれたこと、とても嬉しかったよ。今まで27人の狭い世界で生活してきたけど、入学式でたくさん同級生がいたのにはびっくりしたね。友だちができるか心配だったときも、「大丈夫」と声をかけてくれたこと、忘れないよ。

私が悩んでいるときや落ち込んでいるとき、相談にのってくれて、いいアドバイスをくれたりもしたね。あのときはありがとう。フジは頑張り屋さんだから、受験にむけて勉強めっちゃやってるけど、そんなフジを見ていると「私も頑張らなくちゃ」って刺激されているんだよ。口には出さないけど、本当はフジが私の手の届かないところへ行ってしまいそうで、とても恐かったんだ。

フジを撮っていくうちに、改めて私にとってフジの存在がどれだけ大きいものか分かったよ。今までありがとう。そしてこれからもよろしくね。【三重県 岡嶋佑子】



部活中にも少しの時間を見つけて勉強。

〇 藤田あゆみ

私はどうだろう？

文句をいう前に努力しなくては

入学した通信制高校で、看護師を目指す忍ちゃんと親しくなった。忍ちゃんは17歳の時、つまり今の私と同じ年齢の時に生んだ息子を育てながら、普段は正社員として働き、暇さえあれば高校の勉強と看護学校の受験勉強、そしてちょっぴり恋愛もしている。そんな何事にも一生懸命な忍ちゃんを撮ってみたいと思い、お願いした。

忍ちゃんは想像以上に忙しい生活を送っていた。こんなに忙しいのだから、ぜったい生活に不満を感じていると思う。でも、その不満を忍ちゃんは一言も口にしなかった。そのかわり、看護学校に合格するために、ものすごく勉強していた。生活の中で不満を感じたら、文句をいう前にまず自分の生活を変える努力をしなくてはいけないんだということを教えられた。【山形県 かなこ】



出勤。製造関係の仕事なので、仕事中の姿は撮影できなかった。

呂 梅津忍

素直に自分を見せていくことが大切だ

私のモデルは、りとごつ。「りとごつ」というのはあだ名で、中学からの愛称らしい。りとごつをモデルに選んだのは、私にはないものを持っているから。たとえば、周りにいる人まで元気にしてしまう不思議なパワーもっている。それにかつて柔道をやっていて、痴漢を撃退したというエピソードもある。それから、うれしい、楽しい、悲しいなどの感情にすごく素直。うれしい時はめちゃくちゃ笑って、悲しい時はめちゃくちゃ落ち込む。怒る時だって迫力満点。こんな風に自分を素直に見せられる人って少ないんじゃないかと思う。

私はどちらかというと、人づきあいが苦手で、友だちに本当の自分を見せることができない。だけど人と向きあうことを恐れてはいけない。「素直に自分を見せていくことが大切だ」と、りとごつから学んだ気がした。

【東京都 木ノ内まり】



突然彼氏から着信が。「電車の中だけど、すいているから……」
と言いつけて電話に出る。

呂 堀川真琴

私は私になればいい

私と中條は中学からの友人だ。しかし、私は彼女が今何がしたくて今どういうことに興味があるのか、それほど知っていたわけではない。同じ高校に通うようになり、毎日一緒に登下校をくりかえすうちに、彼女が何を考えているのか、少しだかわかってきたような気がする。

中條はとてもおもしろい。行動を見ているだけでもとてもユーモアにあふれている。特に私が好きなのは、彼女の話す調子だ。私が尋ねたことの答えが、あたり前のように返ってこないところが中條らしい。それにおっちょこちょいなのも中條の魅力だと思う。

私が言いたいのは、中條の中條らしさがいいということ。その人にはその人らしさがある。自分は持っていないその人らしさをいつの間にか好きになっていた。中條の中條らしさを羨ましいと思ったことも何度かある。でも、私は私であって、中條ではない。だったら、私は私になればいい。それに気づいたとき、私はうれしくなった。【三重県 渥美聡子】



教室にて。「さっきの授業、寝ちゃったよ」

呂 中條由紀

社会とのつながりを考える

まっすぐに見つめることのできる人になる

アイウラと仲良しになっているんな話をした。楽しいことじゃなくてもアイウラはつきあってくれた。一緒に悩んだり考えたりしてくれた。その場の気休めじゃなくて、本当のことを言ってくれた。アイウラの意見はわりときびしくて、逆にありがたかった。

主人公をアイウラに頼んだのは、私が彼女に惚れこんでいたから。アイウラが何かを真剣に、優しく、鋭く、きびしく見つめている姿が好きだったし、私もファインダー越しにその「何か」を見たいと思ったから。

実際、アイウラは今を見ているし、これからも見ている。まっすぐ、見るべきものを見すえている。だからアイウラは美しいし、魅力にあふれているのだから。そして私はそんなアイウラがうらやましかった。

だから私もなろうと思う。人のことを、自分のことを、まっすぐに見つめることのできる人に。世界を広げることや、誰かとつながることは、そういうことから始まると思う。【福岡県 三村朋恵】



先生と作品に関して相談しているところ。作品に対する真摯さは、彼女のこの表情を見るとよく分かると思います。

呂相浦裕美

●指導する教師の取り組み ①

ファインダーの向こうの「わたし」と出会う



千里国際学園・大阪インターナショナルスクール教諭(日本語)
原 和久

千里国際学園・大阪インターナショナルスクールは、参加2年目の第6回コンテスト作品制作の過程で、初回からコンテストに参加している大手前高校定時制課程の野村訓先生による作品制作ワークショップを開催、2名が入賞しました。日本語の授業でコンテストに参加するねらいは何か、担当の原和久先生にうかがいました。

千里国際学園って、どんな学校なんですか。

原 ■ 「千里国際学園」は「大阪インターナショナルスクール(OIS)」と「千里国際学園中等部・高等部(SIS)」の二つの学校で構成されています。OISはインターナショナルスクール、SISは日本の学校ですから異なる点も多くありますが、たとえば音楽、体育、芸術などのクラスを合同で英語で行ったり、放課後のクラブ活動や生徒会活動を日英バイリンガルで取り組んだり、学園が小さな国際社会になるように同じ校舎内でさまざまな活動に共に取り組んでいます。私は、OISで外国人生徒に日

本語を教えています、上級のクラスになると日本滞在が長い生徒が多いので、みな日本語も話しますよ。

作品づくりに取り組まれたのは、どうしてですか。

原 ■ インターナショナルスクールの生徒は、留学生と違って明確な目的を持って日本にやってくるわけではありません。両親の仕事の都合で特に選んだわけでもないのに日本で生活することになってしまった生徒がほとんどなんです。生まれ育った「ホームタウン」を離れてやってくるわけですから、心理的に複雑なものを抱えています。言語的にも、学校では英語、校外では日本語、家庭では母語というように使い分けなければなりませんし、文化的にも、日本の文化とも親の国の文化とも違う自分自身の「第三の文化」をどう捉えたらよいか、戸惑う生徒もいるようです。そんな生徒たちに、改めて自分自身の存在を考えるきっかけにしてほしいと願い、コンテストに参加しています。現

彼の働く姿を見て、感動で鳥肌がたった

学校では、いつも一人でさびしそうに行動していた彼。そんな彼の学校以外のようすを見てみたいと思った私は、工作中的の彼をとることにした。彼の仕事は障害者の介護。やさしい眼差しで少年を見つめている彼の姿を、ファインダー越しに見た私は、感動で鳥肌がたった。彼の仕事ぶりを見て、私自身も撮影を中断し、少年と接することに夢中になってしまった。

歩くことが困難な身体障害者の人たちは、車いすで移動することになる。彼らと街を散歩して、いろんなことに気づいた。歩道に落ちている空きかん、倒れている自転車。これらのために車いすは通ることができない。すこしの段差でも簡単にはのぼることができない。そして、もうひとつ気づいたこと。行きかう人たちが、彼らを特別な目で見ること……。とてもいやらしい目つきをしているのに気がつき、悲しくなった。【大阪府

辻幸代】



身内じゃない人を介護するのはまったく初めてなので、とまどったそうです。しかし、この写真の彼の真剣さを見ると、そのとまどいは消えてなくなっているように見えます。

宮脇洋

を抱いているさまざまな先入観を捨てて、カメラの目を通して素直な気持ちで友だちを観察する。そのことを通して、自分自身を見つめ直すきっかけになればと考えたのです。

「日本語」のクラスで、コンテストに取り組む意義は？

原 ■ 今回コンテストに参加した10年生の上級日本語クラスでは、「自分自身」と「友だち」「家族」「学校」「社会」との関わりについて、日本語で考え表現させる訓練を行っています。目標は、「他者」に対する理解に基づいたしっかりした「個」を築くこと。フォトメッセージコンテストもその一環として取り組んでいますが、コンテストは生徒の日本語力を伸ばすという観点からとても有意義であるように思います。

たとえば、主人公に写真を撮ることを許可してもらうには、口頭で丁寧に依頼する必要がありますし、撮った写真にキャプションをつける作業一つとっても、自分の書いたことが読む人に正確に伝わる

かどうか考えなければなりません。また、主人公になった生徒は、写真を撮られるだけではなく、ことばで自分を表現するいい訓練にもなるようです。今回初めて試みた中間発表会（ワークショップ）は、フォーマルなプレゼンテーションの良い練習にもなりました。

今回の野村先生を迎えてのワークショップについてのご感想は？

原 ■ 今回、生徒自身の発表という形で外部の方に作品を見てもらいアドバイスをいただいたのは、本当にラッキーでした。生徒にとって、外部の方から直接感想をいただいたり褒めてもらったりする機会は、実はあまり多くはないのです。生徒はとても自信を持ったのではないかと思います。野村先生からは、写真を撮るときには「距離を変えて、角度を変えて、場所を変えて、時間帯を変えて、背景を変えて」、主人公の五種類・五面体を撮影するようにとアドバイスをいただきました。単に上手に撮りなさいと言

うだけではなく、具体的な指示を与えることで写真の出来上がりは全然違ってきます。ワークショップの後で撮ってきた生徒の写真には、「えっ、こんな表情をするときがあるの？」と私がびっくりするようないい表情のものもありました。野村先生のすばらしいところは、撮影のテクニックは教えても、何を撮るかは絶対に生徒に押しつけないところ。

これは、生徒に文章を書かせるときにも言えることですね。ことばの使い方や表現の仕方は教えても、けっして教師の意見を押しつけたりしてはいけません。写真にしろことばにしろ、さまざまな物の見方や考え方を必要な時に的確に示してやることさえできれば、生徒は自分の力で自由に表現します。生徒が表現したいと思っている「何か」、つまり「心の叫び」はもうすでに生徒自身の中にあるんですよ。生徒の思いが形になるように、生徒が安心して表現できるように、そっと背中を押してやるのが教師の役割かもしれません。

主人公はこう考えた

● 撮影者



誰かと話している奈々。
友だちの前だと顔が優しくなる。

● 伊藤千晶

千晶ちゃんに写真を撮られてよかった

千晶ちゃんにコンテストに出す写真を見せてもらったとき、私は正直びっくりした。その写真のほとんどが笑顔の写真だったから。私は自分があまり好きじゃない。自分に自信がもてないし、人にどう思われてるかをすごく気にして、自分の気持ちとか素直に言えないから。だから、どうしても人と接するとき、距離をおいてしまっているような気がする。だから、写真を見て、「あたし、ちゃんと自然にわらえてるんだなあ」って思った。

私は千晶ちゃんに写真を撮られて、よかったと思う。千晶ちゃんの撮る写真が好きだから、撮ってもらえるのはうれしいし、前よりもっと仲良くなれたような気がするから。そして何より、自分に少し自信がもてた気がしている。ありがとう、千晶ちゃん。【岩手県 早坂奈々】

● 指導する教師の取り組み ②

「本質を見る力」と「自信」を育てる写真教育

大阪府立大手前高等学校定時制課程教諭(実習担当)

野村 訓



第1回から第6回まで、連続でコンテストに入賞しているのが、大阪府立大手前高等学校定時制課程の写真部です。顧問の野村先生に、写真に取り組む意味についてお話をうかがいました。

普段写真部では、どんな指導をしているのですか。

野村 ■ 私は生徒一人ひとりの「固有の原風景」を大切に、撮影は生徒本人の自由な発想に任せています。技術的な指導の前に、フィルムを3本渡して生徒に自由に撮らせ、ベタ焼きを作らせ、100カットの中から生徒が撮りたいもの、すなわち「原風景」の傾向を推測します。次にその傾向に沿って撮るものを指示します。「あなたは本当はこれが撮りたいんじゃないの」と言うのです。この時の生徒の目の輝きが、私との心のキャッチボールの第一歩です。こうして生徒自身が何を撮りたいのかははっきり確認してから、基本的な技術指導に入ります。

つまり、私の指導は生徒のカラーに合わせてするので、指導の種類は生徒の数だけあるのです。「かまう」と「理解する」ことは別物で、「かまう」というのは、生徒の固有のカラーを無視して、こちらから別の色を押し付けることです。しかし、「理解する」ことは生徒の固有のカラーを認知し、まるごと受けとめてあげることです。生徒それぞれのカラーを私が認める。生徒同士も認め合う。その心のキャッチボールで「理解」が成り立ちます。

この「理解」があるからこそ、不登校であった生徒が心を開き、自我に目覚め、克服できなかった幼児性や学力不振といった発達課題にも取り組めるようになるのです。

このコンテストでは身近な高校生の写真を撮りますが、人を写す時のポイントは何ですか。

野村 ■ どんな被写体でもそうですが、人の写真を撮る時には、特にその人を多面的に見た上で撮影するように指導しています。限りなく多面的に見ることで、その人の

何でウチが主人公？

このコンテストの「主人公にしたい」と言われたとき、私は「えー!？」と思わず口にした。その後、テパートの屋上でパシャパシャ撮影している最中にも、「こんなウチ撮って何が楽しいのよ」と思っていた。でもその日は本当に楽しかった。このコンテストのために3ヵ月間、毎日撮られた。時にはお風呂の中まで。でも楽しかった。

彼女は私の楽しいとき、悲しいときを写真におさめながら、時には彼氏のように、時には家族のように、そして犬のように私のそばにいた。

撮影が終わった今でも「何でウチ？」の疑問は消えないけれど、彼女に撮られてよかったと思う。この写真を通して前よりも仲良くなれたから……。

【大阪府 清水梨加】



梨加は休み時間になると教務室へ行く。
大好きな先生に会うために。先生は
「また来たっ」と言いながらも、うれしそう……。

◎ 中才知弥

あるがままの姿に近づけるのです。多面的に見る、多面的な写真を撮る、多面的な映像を見ることは、「ものを見る力」とか「本質を見抜く力」を養います。本校の生徒がこのコンテストのために1,000枚以上撮影することがあるのは、時間、場所、角度などを変えて被写体に近づいた証です。だから生徒の人間観察の鋭さは素晴らしいものがあります。話をする時の人との距離の変化や視線の動きなどにすごく敏感です。この人とは距離を置こうとか、この人とは話せるとか、本能的に見抜く力がでてるのです。ただ、社会にでると自分の都合だけでは生きていけないから、自分と合わない人にもある程度合わせなくては行けない。そういった課題を克服する意味でも、今度は「自信」が必要になってくるのです。

ラー、つまり人格が第三者に認知されることです。「自信」を持ち、「認められた」生徒が自由に撮影した写真と、宙ぶらりんの精神状態や追いつめられた精神状態の生徒の写真には大きな違いがあります。前者には「声」が、後者には「叫び」があります。

「自信」というのは円みたいなもので、方向性が360度あって、どんなふうにも成長するのか、いい意味でわからないのです。一つのことに自信を持つと、いろいろなことに波及していきます。人間関係や教科の学習という具合にね。写真によって自分たちの「居場所」や自己表現手段をも獲得し、いろんなメディアで紹介される。人生変わりますよね。ある生徒は、不登校の時はお先真っ暗だったと言っていましたから。

写真の可能性は大きいということ
ですね。

野村 ■ そうですね。写真を人類共通の言語として、もっと広く社会で認めてもらい、いろいろな学校現場でも取り入れてほしいと願っています。Educate(教育)とは本来「才能を引き出す」という意味ですが、写

真はそうした才能発掘にも、生徒の固有のカラーを発見する上でも役立つでしょう。このコンテストのように写真で表現する場は、生徒の固有のカラーが認知される場であり、内なる魂の声や叫びのスピーカーでもあるわけです。

写真は世界共通です。10代の子どもの考えていることや悩みも、私は共通していると思います。親と親との間に揺れる状態と、大阪インターナショナルスクールの生徒のように文化と文化の間に揺れる状態は、異質なように見えますが「居場所がない」「居場所を求めている」という点では、一緒なんです。今の子どもにとって、「居場所」の確保がとても重要だということです。

子どもの「声」に我々教師や親が応えるためにも、心の様子を写し「心のレントゲン」である写真について、もっと多くの人、特に教師に、理解を深めてほしいと心から願っています。子どもを「誰かのコピーとしての存在」ではなく、「本物の固有の存在」として認める上でも、写真は大きな力になるのです。

写真を撮ることを通して自分を表現した作品が、さまざまなメディアで紹介されることが、生徒の自信になっていますか。

野村 ■ なっています。「自信を持つ」「認められる」ということは、その生徒の固有の力

人間はすばらしい

写真家・審査員長 田沼武能



この地球上には60億の人間が住んでいます。その一人ひとりがドラマを演じて暮らしています。ドラマのテーマはただ一つ、「ライフ」すなわち「人生」です。あなた自身もその60億分の1人なのです。

生命を得た主人公は、成長し、愛し、愛され、喜び、時には怒り、悩み、あるいはやむなく悲しみを引き受けながら、ドラマを進行させるのです。一つとして同じ内容のものはないこのドラマは、今日のこの瞬間にも新しい生命が生まれ、人類社会を豊かにしています。

私は、そうしたドラマの主人公たちを世界中で撮り続けて、気がつけば半世紀を超えています。撮影を続けて私が教えられたのは、この世で最も魅力があり、心を惹かれてやまないのは「人間」だということです。単純な結論かもしれませんが、私にとっては究極の真実なのです。

その魅力は私を地球行脚へと駆り立て、120ヵ国を超える国の人々と出会い、感動をもらってきました。例えば、チェルノブイリ原発事故で被曝し、毛髪を失った少女の美しい瞳。砂漠の中で生きる人のきびしい顔。アンデス山中の長寿村で暮らす長老たちなど、枚挙にいとまがありません。

人間は体全体で自分の心を表現しますが、生

きる姿は顔に象徴的に表れます。顔立ちとは正直なもので、いくら化粧をしても、日々の暮らしや生活態度によって微妙な個性が表れます。あるいは喜怒哀楽の内面の表し方までがそこに浮き上がってくるのです。そこには人間のつちかってきた文化が反映してくるのです。

しかし、多様な人間ドラマの顔を知れば知るほど、同じ糸が見えてきます。愛の表現も子どもの遊びも、そのやり方は千差万別ですが、人間であればこそできることのすばらしさに変わりはありません。その表現方法がさまざまであるからこそ、人間の豊かさにますます胸が高まるのです。

あなた方高校生にしても然りです。みんな生まれたときからそれぞれのドラマを背負って生きています。いま、高校生活をするあなたの暮らしぶりは、今しか撮れません。大切な自分の写真記録であり、友だちの写真記録、今に生きる日本の高校生の記録です。そんな高校生活の一端を写真にまとめ、仲間に、または海外の同世代の高校生たちに見てもらおう、これはお互いを知るため理解するための大切な行為だと考えます。世界の平和は、相手の国の文化を知り、お互いを理解し、認め合うことから始まるのです。それができてこそ、人間のすばらしさが発揮できるのだと思います。

作品制作ワークショップ

TJFでは、コンテストの作品づくりを授業の一環で取り組んでいる教室へ講師(TJFのスタッフや高等学校写真部顧問など)を派遣して、生徒対象のワークショップを開き、作品制作のお手伝いをしています。今回紹介した大阪インターナショナルスクールのワークショップは、生徒による作品の中間発表会に合わせて行われました。一人ひとりが、撮影した写真から5枚を選んでクラスの仲間に披露し、作品のテーマや内容を発表しました。その後、講師を交えて意見交換を行い、写真の撮り方や意味について講師が話し、各自の作品を再検討してもらうというものです。

今年度もワークショップの開催を予定しています。ご希望の

方は、TJFフォトメッセージコンテスト係までお問い合わせください(TEL: 03-5322-5211/FAX: 03-5322-5215/E-mail: photocon@tjf.or.jp)。



昨年、千里学園・大阪インターナショナルスクールで開催された、ワークショップの様子。講師は、大阪府立大手前高等学校定時制課程の野村教諭が務めた。

国際理解の学びとしての「フォトメッセージ」の取り組み

帝塚山学院大学国際理解研究所長・審査員 米田伸次

フォトメッセージコンテスト開催の相談を受けたとき、かつて高校で実践した国際交流の一つの取り組みが、私の頭を過った。日韓交流にかかわる高校生が、自分自身や仲間・友人の日常の暮らしを写真に撮り、それにメッセージを添えた「マイ・メッセージアルバム」を作成、韓国の高校生との交流に活用するというものである。この取り組みは、国境を越え、同世代に生きる若者たちに親近感・共感を抱かせるとともに、日本理解の上でも大きなプラスになったと好評で、今日高校の日韓交流の間に広がっている。

私は、長年国際理解教育、とりわけ国際交流に関わるなかで、二つの課題を抱えてきた。その一つは、日本の若者の多くが、相手に伝えるメッセージを欠いているということ、もう一つは、紹介する日本文化とは何なのかということである。この二つの課題を、日韓交流にかかわる高校生たちは、試行錯誤の話し合いの中から、自分たちの暮らしや生き方、地域のありようを写真に撮り、自分たちの考えをメッセージとして添えて伝えるという活動によって見事解決していった。

TJFのフォトメッセージコンテストもこうした課題に取り組んできた。そしてさらにこのコンテストに参加した高校生たちは、撮影者と主人公という

立場で向き合うなかで、新たないくつかの大切な認識を得るに至っている。その一は、仲間・友人の日常を写真に撮る作業を通して、改めて、仲間・友人の中に、今まで気付かなかった新しい発見をするとともに、さらにそれが自分自身の発見、生き方の問い直しにもつながっていったというものである。その二は、人と人とのつながりによって自分たちは生きている、そのつながりの輪を身近なところから世界へと広げていくことが、世界平和の上で大切であるということへの気づきである。その三は、若者の日常の暮らしや生き方には、国を越えて共通する部分が多くあり、こうした同時代の若者としての共通性の理解こそが、国際理解の基本であるという認識である。

もちろん、6回のコンテストの審査にかかわってきた私には、いくつかの注文もなくはない。その一が、仲間・友人、異文化との学びの出会いをもっと広げてほしいということ、その二は、日常の暮らしをもっとリアルに見つめ、生き方をほり下げてほしいということ、その三は、写真と共に、ことばによるメッセージをもっと大切にしてほしいということ等である。

いま私は、このコンテストを高校の「総合的学習」における国際理解の学習の一環として取り入れることができないものかと真剣に考えている。



第7回高校生のフォトメッセージコンテスト 作品募集中

「高校生のフォトメッセージコンテスト」は、一人の高校生を主人公にして、その人の日常の生活の様子や生き方を、5枚の写真と400字程度の文章(メッセージ)で表現し、国内外の同世代に伝えてもらおうという趣旨で開催しています。応募作品はホームページや写真集を通じて、主に海外で日本語や日本について学ぶ生徒や教育関係者に届けています。

2003年度も第7回コンテストを開催します。ただいま作品を募集中です。今回は「気になるアイツ」がテーマです。一人の高校生を主人公にしたユニークな作品をどしどしお送りください。締め切りは2004年1月10日(土)。

応募要項等に関する詳細はホームページをご覧ください(URL: <http://www.tjf.or.jp/photocon/>)。